

# 箴言の研究

——その資材的考證——

松田明三郎

## 序論

### I 箴言の定義

#### A 一般的定義

一般的に箴言 (Proverb) を定義することは容易でない。いろいろな定義が與えられている。「數語のうち煎じつめられた多くの内容」とか「多くのものの智慧と一人の機智」とか「一般に承認せられて使用せられる短かい力ある言葉」などがそれである。多くの權威者が、彼自身の定義を與えんと試みているのであるが、その主要な特性に關しては、そこに一致せるものが發見せられる。箴言を構成するには次の四つの要素が必要である。第一、簡明 (conciseness) 第二、思慮 (sense) 第三、辛辣 (piquancy) 第四、普及性 (popularity) である。<sup>(1)</sup>

單に短いと云うだけでは箴言の力を表わさない。それはあらゆる場合に眞摯なる思想を提供するものでなければならぬ。取るにも足らない事柄をとりあげたのでは箴言としての威信を克ち得ないのである。辛辣の要素は純粹の古

い諺に具現している機智なのである。その機智に於て箴言は、人々の肺腑を抉るような人生の批判を提供する。それは寸鐵詩であり、矢の逆刺(よこざ)のように、その箴言を人々の記憶のなかに刺し貫いて何時までも忘れさせないのである。(2)

最後に普及性であるが、多くの文學のうち普及性を欠いているために、箴言と認められない言葉が少くない。箴言の資格を得るために、言葉は大衆から湧き出たものか或いは民衆によつて眞實なものとして受け納れられたものでなければならぬ。ドイツの箴言編集家アイゼライン (Eiselen 1840) は、その箴言の定義で、普及性の要素を特に強調して「箴言は、公の刻印をもつて鑄造せられたる文章で、民の間に流通し承認せられたる價值をもつて」と云つた。(3) この普及性の要素は、箴言のラテン、ギリシヤの語原 (etymology) にも含まれている。ラテン語の *proverbum* は「公に於て發言せられたる言葉」であり、ギリシヤ語の *παροιμία* は、「路傍で發言する」意味である。

B 舊約聖書に於ける「箴言」の語義

「箴言」と譯されているヘブル語は *nashal* で、この言葉のもつ本來の意味は、類似 (Likeness) 或いは比較 (Comparison) である。それは一つの事實を、他の類似の事實で代表せしめ、或いは對照せしめて、深い印象を人々の心に與えんとする寸鐵的な短かい對句である。例えば

「美はしき婦のつつしみなきは金の環の豚の鼻にあるが如し」(一一・二二)

舊約の箴言は前記一般的定義に於ける四つの要素を具備せるものである。

II 舊約に於ける賢人の起原とその歴史

「箴言」は舊約文學諸相のうち(ヘブル一・二)智慧文學に屬する一書である。この文學は、賢人或いは智者 (*Haka*・

min)によつて産み出されたものである。古代イスラエルには祭司・預言者と相並んで賢人と云う階級が認められていた(エレミヤ一八・一八)。エースターレイは、古代エジプトやバビロニアにも、この類の階級の間人が存在していた事實から推論して、イスラエル賢人の起原もよほど古いものであると云つて<sup>(4)</sup>いる。その直接の論據は不充分であるが、「教える」と云うことが一人から他の人へとなされた事實がある。例えばサムエル後書一章一八節には「ダビデ命じてこれをユダの族に教えしむ即ち弓の歌これなり。是はヤシヤルの書に記さる。」とあるが、この句はある教える場所の存在と共に學者活動(scribal activity)を前提する。これに関連して「キリアテセプル」(Kiriath-Sepher)「書物の町」七十人譯に従えば「學者の町」(ヨシユア記一五・一五)、また「キリアテ・サンナ」(Kiriath-sannah)「棕櫚の町」(ヨシユア記一五・四九)それは即ち學者が書く材料の名を保存したものである。ダビデの時代の祭司にセラヤなるものがいて、彼は「書記官」(Sopher) scribe に任ぜられている(サムエル後二〇・二五、その他列王上四・三、下一九・二参照)。イスラエルに於ても、古代バビロニアやエジプトに於ける如く學者(scribe)が宗教の任務をも果たしたことは疑う餘地がない。

イスラエルの歴史に於て、賢人のことが最初に明かに述べられるのは、もつと後期であるが、既によく知られた階級として特殊の字句をもつて描かれている(イザヤ二九・四。エレミヤ一八・一八)。比較的初期、まだ王國の存在していた當時から、徐々に賢人は彼等の活動を智慧の材料を集めたり記録したりすることにせよめてゆき、かくして賢人の特殊的意義に於ける、はつきりした團體、賢人(Hakamim)を形成したのである。全然世俗から分離してしまつたわけではなく、賢人が王の前に役目を得ることも皆無ではなかつた(箴言二二・二九の「その業に巧なる人を見るか、斯かる人は王の前に立たん」の「巧なる」は書記或いは學者に關係があるものと思われる。(エズラ書七・六参照)。し

かし賢人の主なる努力は若き人々の教育に集中せられた。青年指導の任に當つた彼等の智慧は、純粹の哲學的思索と云うよりか寧ろ經驗に訴ふる歸納的議論によるものであつた。それは神の存在を前提としている（箴言一・七）。けれどもイスラエルのうちに於ては最も智的なものであつて、單に實際的な方面ばかりでなく、理論的含蓄をも持つていた。日常生活と同様に、宇宙と人生の問題をも解かんとする心の訓練でもあつた。箴言はかくの如き種類の人々に起原するものである。

### III 箴言の起原と發展の三段階

箴言の起原を考察するに當り、そこに世俗的箴言と文學的箴言との區別のあることを認めなければならぬ。前者即ち世俗的箴言は素朴な、直情的なもので本來思はず知らずの間に發生したものである。従つてそれは民の想像力を動かすような歴史的事件などと關係がある。例えばユダ王國がアッスリヤにおびやかされ、明日死ぬるかも知れないと云う國民の危機に際し、誰れ云うともなく「われらくらひ且のむべし明日はしぬべければなり」（イザヤ二二・一三、コリント前一五・三二参照）と云うような諺が生れた如きがそれである。またサムエル前書十章の九―一二節には、「サウルもまた預言者の中にあるや」と云う諺の生れた由來が誌されている。（そのほかエレミヤ三一・二九、エゼキエル一八・二参照）

後者、文學的箴言は思索の所産で、文學的に鍊磨され、推敲されたものである。ヘブルの賢人たちは彼等の箴言著作の基礎として、通俗的箴言から出發したが、彼等の最後の所産は、注意深き勞作のあとを示している。エースタレーイはヘブルの箴言には三つの段階のあつたことを指摘している。<sup>(5)</sup>

第一の段階に屬するものは、文學的に發達の少ないもので、一行詩からなつてゐる。口傳の箴言がそれである。前記の例「われら食ひ且つ飲むべし」や「サウルもまた預言者のなかに」や、そのほかサムエル前二四章一三節にある「古の諺にいふごとく悪は悪人よりいづ」の如きがそれである。しかしこれらには類似 (mashal) の原理が明白には適用せられていない。

第二の段階は文學的表現の時代である。それは民の自由なる發言ではなく類似 (mashal) の原理が適用せられてゐる。それは作者の心の思索の所産であつて、人々の記憶を助ける目的として mashal の形態が意識的に採用せられてゐる。この段階のものは二行詩に依つて代表せられる。箴言のうち最も古い部分とせられてゐる第十章一―二章一六 (箴言八集中の第二集「ソロモンの箴言」) には、三百七十五の二行詩が含まれてゐるのである。

第三の段階。最後の段階に於て箴言的文學は大いなる發展を示し、二行詩形から小規模の論文型 (miniature essay form) をとるに到つた。二章一―二の「智慧の勸告」や、二十二章一七―二二の「汝の耳への勸告」や二十七章二一―二七の「牧羊の歌」、三十章一六「ヤケの子アグルの言葉」、三十一章十一―三二「賢き婦人の讚美」などがその例である。G・C・マーチンは近代の文學でこれに比すべきものは「ベーコンのある論說」であると云つてゐる。<sup>(6)</sup> ただ箴言作者は、比較的長い小規模論文型の場合に於ても、人々の記憶を助けるための苦心を拂い、數え歌やいろは歌の形式を用いてゐる。その思想を數え歌で排列して記憶を助ける方法は、早くも前八世期既に發見せられていたのであるが (アモス一・三一・二・六)、後期の詩 (詩篇六二・一一、ヨブ記五・一九、三三・一四、四〇・五) のうちに屢々見出される。箴言に於ては三十章七―九、一五―三一に最も完全な例が保存せられてゐる。四つまで數えることが通例となつてゐる。いろは歌も記憶を助けるための工夫であつて、箴言的傾向の詩篇のうちに (一一九篇) 完全な例が見出され

るのであるが、箴言三十一章一〇—三一の「賢き婦人の讚美」も代表的なるものである。この最後の文學的形式は第二段階の二行詩に比して年代的に新しいものであることが推論せられる。

文學的箴言の作者は、二行詩に於ても長詩に於ても、その丹誠の勞作に當り、各方面にわたつて資材を求めている。我々は本論に遡入つてその考證に當るのであるが、説明の便宜のため幾つかの區域(sphere)に分つて論述したい。

## 本論 聖書の箴言の資材的考證

### I 自然の觀察より得たるもの

賢人たちは自然界を觀察することによつて、そこに、S・R・ドライヴァの云つた如く「神の攝理的排列或いは意匠の論據」“evidence of providential arrangement or design”<sup>(8)</sup>を發見する(箴言六・六—一、三〇・二四、ヨブ三八—四一章)。箴言八集の全てをソロモンの作とする傳説をそのまま認め難いとしても、イスラエルに於ける智慧の運動が、自然界の觀察と深い關係のあつたと云う傳説には傾聴に價するものがある。「彼(ソロモン)箴言三千を説けり……彼又草木のことを論じてレバノンの香柏より牆に生る苔に迄及べり。彼亦獸と鳥と匄行物と魚の事を論じたり」(列王上四・三二—三三)。

扱て我々は自然界を鑛物界・植物界・動物界の項目に分つて考證をすすめる。

#### A 鑛物界より得たる資材

「鐵は鐵をとぐ、斯くの如くその友の面を研ぐなり」(箴言二七・一七)

「機にかなひて語る言葉は、銀の彫刻物に金の林檎を嵌めたるが如し」(同五二・一一)

「金は火にて試みられ、嘉せらるべき人は苦難の爐にて試みらる」(ベン・シラの智慧二・五)

「瀝青に觸るる者は汚されん……」(同二三・一)

「土の器は釜と何の交りをか持たん、彼と此と打合せば碎かるべし」(同二三・二〇)

「鉛よりも重きものは何ぞ」(同二二・一四)

「砂も鹽も、また鐵の塊も、悟なき人よりも負ふに易し」(同二二・一五)

**B** 植物界よりの例としては次の如きがあげられる。

「父が酸き葡萄を食ひしによりて兒子の齒うく」(エレミヤ三一・二九。エゼキエル一八・二)

「蔬菜を食いて互に愛するは肥えたる牛を食ひて互に恨むるに愈る」(箴言一五・一七。一七・一参照)

「糠いかで麥に比擬ことをえんや」(エレミヤ二三・二八b)

**C** 動物世界の觀察によつては次の如き資材が求められている。

「惰者よ蟻にゆきて其爲すところを觀て智慧をえよ。蟻は首領なく有司なく君王けれども夏のうちに食を備へ、收穫のときに糧をあつむ」(箴言六・六、七)

「牛なければ飼畜倉むなし、牛の力によりて生産づるものおほし」(同一四・四、ベネシラ二六・七参照)

「蝗は王けれどもみな隊を立てて出づ」(箴言三〇・二七)

「馬の爲めには策あり、驢馬の爲には衡あり」(箴言二六・二)

「蜂は飛ぶものの中にて小さけれど、その生産物は甘き食物の長なり」(ベン・シラー一・三)

「誰か蛇に咬まれたる魔術師若しくは野獸に近づきし人を憐まん」(同二・一三)

「すべての生物はその同族を愛し、すべての人はその隣人を愛す」(同三・一七)

「狼は小羊と何の交をか持たん」(同三・一七)

「蛇の顔より逃るる如く、罪より逃れよ、これに近づかば噛まれん」(同二・二)

「犬おのが吐きたる物に歸り來り、豚身を洗ひてまた泥の中に轉ぶ」(ペテロ後二・二二)

「豹その斑駁をかへうるか」(エレミヤ一三・二三)

## II 人間世界の觀察より得たる資材

多くの箴言がこの區域から得た資料によつて作られている。個人生活と國民生活との二つに分けて考えられるが、前者の場合、神の應報についての人生の矛盾は哲學的思辯にまで導かれるので、Vの哲學的思索の項にゆずり、ここでは一般的な人間生活の觀察から得た資材を取扱うことにする。

### A 個人の生活

「柔和なる答は憤恨をとどめ、厲しき言は怒を激す」(箴言一五・一)

「情者は寒ければとて耕さず、この故に收穫のときにおよびて求むるとも得るところなし」(二〇・四)

「すべての勤勞には利益あり、されど口唇のことは貧乏を來らすのみなり」(一四・二三)

「相争ふ婦と偕に室に居らんよりは屋蓋の隅にをるはよし」(二一・九。二五・二四。二七・一五參照)



「獅子及び龍とともに住むは、悪しき女とともに家を保つよりも善し」(ベン・シラ二五・一六)  
「友は幸福の時に試みられず」(同一二・八)

「坑を堀るものは自ら之に陥らん」(箴言二六・二七、傳道之書一〇・八、ベン・シラ二七・二六参照)  
「舗石に滑るは舌の滑さに勝る」(ベン・シラ二〇・一八)

### B 國民生活の觀察

箴言は概して個人主義思想の立脚地から語るものであるが、ある箴言は國民生活或いはもつと廣い人類の圈内から教訓をひき出している。

「義は國を高くし罪は民を辱かしむ」(箴言一四・三四)

「エテオピア人その膚をかへうるか」(エレミヤ一三・二三)

「主は國々の根を抜き取り、その後には卑しき者を植え給ひぬ。主は國々の土地を覆し、地の基に至るまでこれを滅し給ひぬ」(ベン・シラ一〇・一五、ヨブ記一二・二三、「國々を大にしました之を滅し、國々を廣くしましたこれを舊に歸し……」参照)。

### III 異邦の智慧文學より得たる資材

廣義に於にはこれは人間世界の觀察の區域に屬すべきものであろうが、便宜のため項を更えて考察する。イスラエルの智者たちは他國を旅行したり、或いは翻譯書を通して、異邦の智慧文學を研究し、そこから箴言の資材をとり入れたらしく思われる。ベン・シラの智慧によると彼等智者たちは、他國に旅行をしたことが誌されている。「古の凡て

の人の智慧を探り……異邦の地に旅すべし」(三九・一、三)。ヨブ記のエリフも「われ廣くわが知識をとり」(三六・三)と告白している。エースターレイも云つてゐる如く「他國の智慧文學は彼等に、物ごと全ての上に廣い見解を與えたのである。」<sup>(9)</sup>イスラエルに於ける世界主義はアモス書(一一二章)などにも既に見受けられるけれども、彼等の民族を超越した世界主義はそう云つたところにも由來するものと見做し得よう。

#### A エドムの智慧

舊約聖書中にはエドムの智慧のことが所々に暗示せられている。ヨブ記二章十一節に紹介せられているヨブの三友のうちエリパスはエドムの賢人として描かれている。テマンはエドムにあつた(創世記三八・九、一一参照)。そのほかエドムの智慧についてはエレミヤ記四九・七、オバデヤ八節に誌されている。

#### B エジプトの智慧

列王記上四章の三〇、三一にはソロモンの智慧が「東洋の人々の智慧とエジプトの諸の智慧よりも」優れていたことが誌されている。イザヤもまたエジプトの智慧に言及して「汝の智者いづくにありや」(一九・一一、一二)と云つてゐる。最近の考古學は、古代エジプトの智慧文學を明るみに出してくれた。先ず箴言の資料問題として取り上げなければならぬ文献は「アメン・エム・オペの教訓」<sup>(10)</sup>「Teaching of Amen-em-ope」と呼ばれる箴言集である。

この箴言集発見の事情は次の如く伝えられる。<sup>(10)</sup>一九二三年にバッヂ博士(Dr. Wallis Budge)は、一八八八年に英國博物館に收められたエジプト僧侶文字の原本パキストのことを発表した。それはオシリスの像(Osiris-figure)の洞穴から発見せられたものであつた。バッヂ博士が発表した時には、箴言に併行した二つが示されたのみであつたが、聖書の解釋の上に重要な注意を呼び起すようになったのは、一九二四年にベルリン大學の有名なエジプト學者アドルフ・

エルマン (Adolf Erman) の功績によつた。その後更にグレスマン、ゼリン、D・C・シンプソン、エースターレイ等によつて研究の光明が投ぜられた。

アメン・エム・オペはパノポリス (Panopolis) に住んでいたエジプト政府の役人で高い地位のものであつた。彼はエジプトの「農業大臣」と呼ばれていた。彼はミン (Min) の祭司であつた末子の指導のために三十章よりなる箴言集を作つた。それは豊富な経験の結實であり、宗教的倫理的教訓の書であつた。この箴言集は極めて高い秩序のもので、實に古代キリスト教文學前期のものとしては、舊約聖書を除けば、特異なものであつた。その著作は古代エジプト人によつても高く評價せられ、役人のための學校の教科書として使用せられていたと云う。

この箴言集の年代は 1500—700 B.C. と推論せられている。

このエジプトの著作は我々の箴言の各所に影響を與えているが、特に二二章一七—二四章二一と密接な關係がある。思想と言葉使いに於て偶然とは思われな<sup>(11)</sup>一致點があるのである。權威者の多くのものは、ヘブルの書物がエジプトのそれに依存していると云うことを認めている。

以下兩書の比較を試みたい。

### 箴言

一・八、九。

わが子よ汝の父の教をきけ汝の母の法を棄ること勿れ  
これ汝の首の美はしき冠となり汝の項のかざりとならん。

アメン・エム・オペ

アメン・エム・オペが子に云つた言葉。

汝の耳を與へ語られる言葉を聞け。

汝の心をわが言葉を理解するために與へよ。

わが言葉を汝の心に留め置くは善きことなればなり。

一六・一一

「公平のはかりと天びんとはヤアウエのものなり。  
ふくろにあるぶんどうもことごとく彼の造りしものな  
り。」

一七・五

貧しき人を嘲るものはその造主をあなどるなり。

一六・九

人は心におのれの途を考へはかる。されどその歩み  
を導くものはヤアウエなり。

わが言葉を軽んずる者にも禍ひあれ。わが言葉を汝の  
腹の小箱にしまい置けよ。そはわが言葉が汝の心に於  
ける門口(?)とならんためなり

ぶんどうをいつわり動かすなかれ、穀物をはかる量を  
減する勿れ、アペ(Ape)ははかりの側に座し給ふ。  
彼の心臓はおもりなり。

(註) おもりは神の心臓の形につくられている。

ソス(Thoth)の如く偉大なる神いづくにありや、彼  
はこれらを發明し造れるものなり。

神の御手にある人を嘲る勿れ、彼罪を犯すとも怒ること  
となかれ。

人々は思ひ思ひのことを語れど、神のなすところはこ  
れと異なれり。

一六・八

義によりて得たるところの僅かなるものは不義によりて得たる多くの寶にまさる。

二〇・九

たれかわれわが心をきよめわが罪を潔められたりといひ得んや。

二二・一七—二四 は特に併行の多い集である。

二二・一七

「汝の耳を傾けて智慧ある者の言をきき且つなんぢの心をわが智慧に用いよ。」

二二・二〇

(現行譯)われ勸言と知識とを含みたる勝れし言を汝のために録ししにあらずや

〔勝れし言 (shiloshim) と譯されているヘブル語が問題の句で七十人譯では「三度」となっているが、本来はアメン・エム・オペの如く「三十」(章) sheloshim と修正せらるべき

神なくして倉にある寶よりも神の御手にある貧はよし禍ひをもて富めるよりも、祝福せられたる心をもて一片のパンを食ふはよし。

われ罪なしと云ふこと勿れ(それをかくさん)として苦しむことなしと云ふなかれ

汝の耳を興へわが言はんとするところを聞け。汝の心を理解のたむけよ。

汝ら自らのためにこれらの三十章を見よ、それらを歡びて教へよ

字であつたであろう。

二二一・二二一

弱きものを弱きがために掠むることなかれ、艱難者を門にて壓しつくること勿れ

二二一・二二四

怒る者と交ること勿れ、憤る人とともに往くことなかれ

二二一・二二八

なんぢの先祖がたてし古き地界を移すこと勿れ（但しこれは申命記一九一四にも見受けられる）。

二二一・二二九

汝その業に巧なる人を見るか、斯かる人は王の前に立たん、必ず賤しき者の前にたたじ

二二三・六、八

悪しき目をする者の糧を食ふことなく、その珍き饘を貪りねがうことなかれ……汝ついにその食へる物を吐出にいたり且その出しし懇勸の言 (Flattering)

箴言の研究

汝自らを貧しき人より奪はざるよう守れ、弱きものに暴君として臨むことなきよう心せよ。

狂暴なる人と交はる勿れ、彼と會話を交すことなかれ

田地の境に立てる境界標を動かす勿れ

彼の職務に熟練せる書記は官廷官吏たるの價値を見出すを得ん

下卑なる人の所有を渴望することなかれ、また彼の糧を貪ること勿れ……

もし汝、汝の口をあまりにも多くの糧にて充たさば吐

一七

words) もむなしくならん

二三・四、五

富を得んと思ひ煩ふこと勿れ……富はかならず自ら翹を生じて驚の如く天に飛びさらん

二四・二九

彼の我に爲しし如く我も亦かれになすべし。われ人の爲ししところに循いてこれに報いんといふこと勿れ

(二〇・二二参照)

き出さん。かくて汝は汝の善きものを空しくすべし

富に心を留ること勿れ、餘分の金に思ひ煩ふこと勿れ〔富は〕驚鳥の如く自ら羽をとりて、空のかなたに飛び去らん

「強盜をわがために見せよ、そは汝の町にてある男我を傷けたり」と云ふこと勿れ。「贖ひ人を我がために見出せ。そは私の嫌悪せるもの我を傷けたればなり」と云ふこと勿れ。

バビロニアの箴言に「汝に悪しきことをなすものに汝善きことをもて返すべし。汝の敵を正義をもて汝計るべし」と云うのである。<sup>(12)</sup>

以上の如き比較によつて我々はエジプトの箴言集アメン・エム・オペと我々の箴言とに親密な関係のある事實を認めざるを得ないであろう。エースターレイはイスラエルの精神がエジプトの箴言に與えた感化を考へるけれども、T・H・ロビンソンを始め多くの學者はヘブルの賢人がエジプトから貸りたと云う學説に高い可能性のあることを認める。<sup>(13)</sup>如何にしてイスラエルの賢人がこの書物を所有するに到つたであろうか。ベン・シラの智慧によれば、前にも述べ

た如く、賢人たちは廣く當時の世界を旅行して王や貴族と交つて見聞を廣くした(三九・一)とあるから、かかる機會にエジプトの箴言を學ぶことが出来たであろう。ランストンはもう一つの推測を提供している。それはペルシャ時代にエジプトに生存していた離散のユダヤ人が同胞のためにヘブル語に翻譯し、それが聖書箴言の資材としてとり入れられたものであらうと云うのである。<sup>(14)</sup>

何れにせよ箴言の作者は、エジプトの資材を手にながらも、單にそれを、そのまま翻譯したのではなく、眞のイステルの高貴なる精神をもつて改訂しているのである。ランストンの云つてゐる如く「アメン・エム・オペの教訓を使用しながら、彼はヤアウエの宗教と相容れない全ての多神教的な要素や、その他のものを排除した。エジプトの神々への引用は削除せられている。異邦の宗儀への言及は見過している。そして意義ある數々の加筆が試みられている『汝をしてヤアウエに倚頼ましめんが爲めに』(箴言二二・一九)などは、その素晴らしき一例である。全てがヤアウエの圏内にもたらされているのである。<sup>(15)</sup>」

ヘブルの賢人達は彼等の箴言を作るために異邦の資材を利用しながらも、何時もそれらを彼等自身のものとなし、彼等以前のものよりはるかに優れたものに變化せしめることに失敗することはなかつた。

### C バビロニアの智慧

バビロニアの智慧文學はさほど多くは発見せられていないが、それが如何に高きものであるかを評價するには充分である。「バビロニアのヨブ」と考古學者によつて呼ばれている苦難の文學は、その主題がヨブ記に似ているので有名である。これは紀元前二千年頃の作とせられる。そのほか「二國語で書かれた箴言集」(The Bilingual Book of Proverbs)これは紀元前九世期の作とせられる。また「バビロニアのコーヘレス」(Ein Babylonischer Koheleth



by Ebeling, 1924) は傳道之書と主題が類似しているので、問題となつたものである。更に我々の箴言と類似せるものに「アヒカルの箴言」(The Proverbs of Ahikar)がある。これは一九〇六年から一九〇八年にわたつて發見せられたエレファチン・パピリー (Elephantine Papyri) のなかに含まれていた賢者アヒカル (the Wise Ahikar) の物の斷片である。アラマイク語、シリア語、アラビア語、アルメニア語等に譯されているものであるが、アラマイク語でパピラスに誌されているこのテキストは、420—400 B.C. に書かれたものであるが、原本そのものは 550—500 B.C. よりも早いものとせられて<sup>(16)</sup>いる。エースターレイはこの文献は本來バビロニア語で書かれたものであることを認めている。この書物と箴言との關係については説があつて、ある學者 (Cowley, の如き) は、兩者の類似は箴言作者がアヒカルから借りたものでなく、東方共通の智慧の資源に兩者が負うているのだと云う。しかしエースターレイを始め多くの學者はイスラエルの賢人が、アヒカルに負うていると認めるのである。

箴言

アヒカルの箴言

二二一・三

子を懲すことを爲さざる勿れ、鞭をもて彼を打つとも死ぬることあらじ、もし鞭をもて彼をうたばその靈魂を陰府より救ふことをえん。

(二三・二四、一九・一八参照)

わが子よ、汝の息子を鞭をもてこらさざる勿れ。そは子供を打つことは園の肥料の如く、驢馬の綱の如く、驢馬の繋ぎ繩の如し。わが子よ、汝の息子の尙ほ幼き間に服従せしめよ、彼が汝よりも強く大きくなり、汝に逆かざる前に。然らざれば汝は彼の凡ての腐敗せる行爲の故に恥をかかん。

二七・五六

明かにいましむるは祕かに愛するにまさる。愛するものの傷くるは眞實よりし、敵のくちづけするはいつはりよりするなり。

三一・三〇

つややかはいつはりなり、美はしきは呼吸のごとしただヤアウエを畏るる女はほめられん。

二四・一七

汝の仇たふるとき楽しむ勿れ。彼の亡ぶるとき心に喜ぶこと勿れ。

イスラエルの賢人たちは、アヒカル箴言の影響を受けたかも知れないが、エジプトのアメ・エム・オペの場合と同様に、單なる異邦文學の模倣ではなかつた。それは彼等の根強い基礎となつていものが既に存在していたからである。そしてその基礎とは彼等自身の繼承した宗教的傳統に外ならなかつた。

わが子よ賢き人をして多く汝を吾打たしめよ愚かなるものをして甘き軟膏をもて汝の傷をいやさしむる勿れわが子よ女の美はしきを追い求むること勿れ。汝の心に彼女を戀ひしたふ勿れ。そは女の美は彼女のよき心掛けに存し、彼女の飾りは彼女の口の言葉にあればなり。

わが子よ汝の敵の繁榮をねたむこと勿れ。彼の患める時歡ぶ勿れ。

わが子よもし汝の敵惡をもて臨まば、汝は智慧をもてこれに會へ。

#### IV 自國の宗教的傳統

##### A 律 法

エースターレイは「箴言作者の教訓の基礎は聖書であつた」<sup>(17)</sup>「Basis of their teaching was scripture」と云つて  
 いるが、その見解は正當とせられる。「聖書」と云つても彼等の時代に存在していたものは「律法」(torah)と「預  
 言」<sup>(18)</sup> nabin であつた。二十八章一八節に於ける「黙示なければ民は放肆にす。律法を守るものは幸なり」の言葉は彼  
 等智者の時代に於ける律法と預言の存在を前提する。

さて箴言作者が律法を尊重している事實は、律法を棄つるものは、悪しき者をほめ、律法を守る者はこれに敵す」  
 (二八・四)。「耳をそむけて律法を聞かざる者は、その祈すらも憎まる」(二八・九)と云つた箴言に依つて證明せられ  
 る。そればかりでなく、律法を精神を箴言のうちにとり入れているのである。ある學者は、申命記と箴言第一集(一  
 一九)との間に於ける調子と感情のあたたかさと表現の類似とを認めている。申命記が次の時代の心の底にモーセの  
 律法を植えつけたように、箴言作者は彼の聽者に智慧の律法を刻印したのである。<sup>(19)</sup>

なおまた箴言のうちには申命記の律法の言葉そのものを取り入れて箴言化したものが見受けられる「なんぢの先祖  
 がたてし古き地界を移す勿れ」(二二・二八)は申命記一九・一四と併行している。また律法の教へる初穂の什一を捧  
 げる儀式の如きを強調する。「汝の貨財と汝がすべての産物の初生をもてヤアウエをあがめよ」(三・九、申一八・四、二  
 六・二参照、またベン・シラ七・三一をみよ)。ベン・シラは「智慧を得んと欲すれば誠を守れ」(一・二六、二四・二三)と  
 教えている(その他ベン・シラ九・一五、一〇・一九、三二・一五―二四、一五・一、一九・二〇、二一・五、三四・八参照)。

## B 預 言

預言書のある章では、(エレミヤ八・八。イザヤ二九・一四の如く) 智者は預言者に輕侮せられているかの如く響く。しかし舊約一般には、預言者は智者に對して友誼的感情を披瀝しているのである。調子や言葉使いに於て、彼等は時々賢人たちに感化せられている。例えば農夫の智慧の起源などがそれである。(イザヤ二八・二三―二九、その他二九・二四、三三・一一)。メシアの性格のうちには「智慧の靈」がそなわらなければならぬことが認められている(イザヤ一・二)。アモスのうちにも賢人的要素が見受けられる。ハアパーの指摘している如く「彼は彼の觀察に於て正確であり、心の氣質に於て科學的であつた。彼は單に事實を見ることが出来たばかりでなく、またそれが事實あるが如く記述した。彼の性格に於けるこの要素が預言に對する新しい衝動に貢獻するところ大であつた。これは賢人の要素(the sage element)であつた。」更に彼はつづける「アモスに於ける新しき要素は賢人に依つて代表せられるものである。ナアビと賢人が一人の人物に於て結合して新しき意義の預言者を生み出した。」<sup>(21)</sup>アモスと智慧文學との關係は外面的には示されていないけれども、民族を超越した箴言の世界主義の基礎は外國の感化によるばかりでなく、イスラエル國內に於てもアモスによつて最初に敷かれていたのである。

ホゼアもその預言に於て知識の要素を強調している(四・六、六・三、六)。ホゼア書一四章の九節は加筆であるけれども、それは宗教に於ける智慧を重要視したホゼアの精神に適はしきものである。

箴言は預言と對立するものではなく、その精神をとり入れその基礎の上に立つている。貧しきものを憐む精神(箴一九・一七、一四・三一、一七・五、二二・二)はアモスの精神であつた(二・六、七)。神への信賴を教えた箴言(一六・九、一九・二)はエレミヤに起原をもつている(一〇・二三)。人間の誇をいましめた箴言(二一・四)はイザヤ書二章一

一—一七に基礎を置くものである。儀式よりも正義を強調した箴言(二一・三、一五・八、一六・六、二一・二七)も預言者の精神に汲むものである(イザヤ一・一〇、ホゼア六・六)賄賂の排斥と裁判の公平(箴言一七・一五)もイザヤの教訓であつた(五・二三)。

かくみる時、箴言は本質的にその資材を預言者の教訓に得ていることが明かにせられる。

## V 哲學的思索

### A 宇宙論

セム族には哲學的才能はなく、抽象的思索よりも寧ろ先づ強く感じると云うところに長所があつた。彼等は繼續的に思索しない。従つて彼等には込み入つた思想の繼續がない。ヘブルの天才は抒情詩とか短かい預言的宣託に於て發揮せられ、深い意識的反省は稀れである。彼等が他民族と接觸するに到るまでは形而上學的思索は見當らなかつたとさえ云われる。<sup>(22)</sup>

舊約の歴史に於てヘブル人が宇宙創造への哲學的思索を始めたのは、バビロニア俘囚時代以後である。祭司典(Priestly Code 444 B.C.)の著者は、神の言葉による宇宙の創造を考えている(創世記一・三)。恐らくこの思想の影響を受けた詩篇作者も「もろもろの天はヤアウエの御言によりて成り」(三三・六)と歌つた。後期の作と思われる一〇四篇の詩人も世界の創造が神の智慧によつていることを認めている「ヤアウエよなんぢの事跡<sup>みわざ</sup>はいかに多<sup>さ</sup>なる。これらは皆なんぢの智慧にてつくりたまへり」(二四節)。

箴言に於てもかかる宇宙論的思索が主題<sup>テーマ</sup>として取扱われている。

「ヤアウエ智慧をもて地をさだめ、聰明をもて天を置<sup>た</sup>えたまへり、その知識によりて海洋<sup>うみ</sup>はわきいで雲は露をそそぐなり」(三・一九—二〇)。

この主題が第八章に於ては一層の展開を示して、そこでは智慧が人格化せられ、世界の創造に參與したことが歌われている。

「ヤアウエいにしへ其御わざをなしそめ給へる前に、その道の始めとして我をつくり給ひき、永遠より、元始より、地の有らざりし前より我は立てられ、いまだ海洋<sup>うみ</sup>あらず、いまだ大なる水の泉あざりしとき我すでに生れ、山いまださだめられず、陸いまだ有らざる前に我すでに生れたり：彼：地の基を定め給へる時、我はその傍にありて創造者となり、日々に欣び、恒にその前に楽しみ、その地にて楽しみ又世の人を喜べり」(二二—二四、二九—三一)。

この思想はヨハネ傳の序章のロゴス論に再鑄造せられているのであるが、箴言作者はかかる深遠なる哲學思想を何處に求めたものであろうか。この質問に對しては、自國説と異邦説とが考えられる。

自國説。この思想は、他國から借りたものでなく、ユダヤ教自身から成長したものであると云う學説である。ウヤルヘルム・シエンケ(Wilhelm Schenke)はこの思想をヘブルの神話から成長したものと見做し、その論據をヨブ記のエリパスの演説中の言葉「汝<sup>い</sup>に最初に世に生れたる人ならんや、山よりも前に出で來しならんや。神の御謀議を聞きしならんや智慧を獨にて藏<sup>い</sup>めをらんや」(二五・七—八)に求め<sup>(23)</sup>る。

異邦説。この思想を異邦から借りたと云う學説にも數種類あつて(1)ギリシヤ説、(2)ペルシヤ説、(3)バビロニア説がそれである。

(1)ギリシヤ説。この説の代表者はトオイである。彼は、ギリシヤ思想の普及せる時代に、そのアトモスフェアの

中で作られたもので、アレキサンドリアのファイロの哲學もこれと同じ流れであると云う。<sup>(24)</sup>

(2) ペルシア説。ランキンは「ユダヤ文學にかくも急速に、かくも神秘的に出現したのは、それが外國の起原であることを直ちに結論せしめる」と云うブーセ (Bousset; Rel. d. Jud. p. 520) の意見を引用しつつ、彼と共にペルシアの感化説を稱える。ペルシヤに於てはアフラマヅダ (Ahura Mazda) は智慧の主であるが、彼はこの世界の存在に先だつて「聖なる不滅のもの」(Amesha Spentos) を創造した。かくの如き思想が、箴言八章の作者に感化を與えたと主張する。<sup>(25)</sup>

(3) バビロニア説。この思想に類似せるものは既に古代バビロニアにあつた。バビロニアの天地創造の神話の冒頭は「天いまだ名づけられず地いまだ名づけられざる時」と書き始められている。これは天地の出現に先だつてその名が存在していたこと、即ち言葉が存在していたことを暗示するのである。

傳道之書の空の思想やエピキリアンの享樂の思想の場合にしても、從來ギリシヤ思想の感化説が決定的の如く考えられていたが、バビロニアから所謂「バビロニアのコーヘレス」と呼ばれる文献の發見せられたことによつてその説が、根本からくつがえされた例もある。(G. A. Barton, Proverb 参照)。將來ギリシヤ説やペルシヤ説などをくつがえすもつと有力な文献がバビロニアから發見せられるかも知れない。

前記自國説で引用したエリパスの言葉は、ヨブ記の作者が箴言八章を知つていたとも考えられるので(ヨブ記三八・二一参照) 論據は薄弱である。今日のところ多くの學者は異邦の思想との接觸を問題としてしているのである。しかしその異邦が何れの國であるかは決定に困難であるが、恐らくバビロニアに源泉をもつたものであろう。しかし何れの國

の感化を受けているにせよ、それがイスラエル独自のものとなつてゐることは明白である。

## B 人生問題

人生に對する哲學的懷疑思想は、舊約では傳道之書によつて代表せられてゐるのであるが、箴言に於ては第三十章に懷疑的思索の跡が見受けられる。この章の冒頭(二一四)だけでは、有限なる人間が無限なる神を了解する能力に關する不可知論的嘆聲であるが、智者の根本問題は、單に神の認識と云うよりも、寧ろ人生の觀察から來た神義論(Theodicy)の問題である。彼は「耐ふること能はざる」事實として、彼の見聞した人間社會の矛盾混亂を擧げてゐる(二二)。箴言の編者はこれらの箴言に「ヤケの子アグル」の名を附してゐるが、それがヘブル人の名でないことは一般に認められてゐるところである。恐らく異邦アラビヤあたりから取り入れた資材であらう。

## VI 啓示

我々は箴言の資材(material)についてあらゆる角度から考證したのであるが、結局それらの資材を最後にまとめ制作するのは箴言作者の心の能力である。そしてそれは神によつて授與せられたものである。それは「上よりの智慧」(ヤコブ三・一七)である。啓示とは如何にして至高なる神が人と交渉し得るかと云う問題であるが、律法が神より授與せられ、神の言葉が預言者の聲を通して與えられたように、智慧は賢人に上より神が與えたものである。神の靈がヨセフを賢明にしたと誌されている(創世記四一・三八)。ソロモンの智慧の源泉は神であつた(列王上三・一二、一三)詩篇に於ても神が人の「かくれたるところに」「智慧をしらしめる」ことが歌われている(五一・六)。箴言に於ては特に屢々神の靈による智慧のことが述べられてゐるのである。



「視よわれ我が靈を汝らにこそぎ我が言をなんぢらに示さん」(一・二三)

「ヤアウエは智慧を與へ、知識と聰明とその口より出づればなり」(二・六)

「人の靈はヤアウエの燈火なり」(二〇・二七)

「(神は)人にさとりを與へ給ふ」(ベン・シラ三八・六)

舊約の箴言がそのなかに、問題とせられるような箴言を含みながらも、全體として宗教的に高く評價せられるのはそれが靈感による智慧の要素を豊かにとり入れているからである。けれど箴言が啓示宗教の正典の一書たり得る所以であらう。

## 結 語

舊約の箴言は預言者活動が終止し、律法宗教が儀式主義に凝結せんとした時代に於て、次代の國民指導の使命を果したものであつて、その感化力には極めて高いものがあつた。故に今日我々が次の時代の國民を教育するに當つて、箴言を研究し、使用すべきことは勿論であるが、同時に彼等賢人達のとつた方法にも、幾多の示唆を發見し得るであらう。我々は、自然界の觀察に於て或いは世界の文學の探求に於て、或いは聖書の研究に於て、或いは哲學的思索に於て、更にまた上よりの啓示を通して、あらゆる圈内より資料を得て、箴言的文學を創作し、若き人々の心に、鋳<sup>も</sup>を打ち込み終生ぬけないような感銘を與えたきものである。最後に我々はそう云つた智慧の普及をはかる義務がある。古代の賢人たちは、彼等の箴言の普及化のために街頭に叫んだのであつた。

「智慧は呼ばざるか。彼は路のほとりの高きところ、また街衢のなかに立ち、邑のもろもろの門、邑の口および入口に呼びりていふ。人の子よわれ汝を呼び、我聲をもて人の子等をよぶ」(箴言八・一―四)。

ここで智慧は人格化せられてはいるが、人々が實際彼等智者のもとに集つて來た場合を暗示している。疑いもなく廣場に於て、群集の前で智慧の宣教がなされたものである。またある時には大講堂も使用せられたことが、「智慧はその家を建てその七つの柱を砍成し」(同・九一)の句に依つて察知せられる。ベン・シラは「無智なる者よわれに近づきわが學舎に宿れ……價なくして汝のために智慧を得よ」(五一・二三)と書いているが、この「學舎」Beth-hamidrashは教授のための大講堂であつたと云われる。智慧が土に埋れた寶とならず、普遍化せられ人類の所有となつたのは賢人等が宣教にとめたからである。かく觀する時、我々は智慧に對するイエスの態度を思わざるを得ない。

イエスは智慧を預言に次いで尊重せられ「預言者智者をつかわさんに……」(マタイ二三・三四)と云つておられる。(その他ルカ一・四九、箴言二五・六、七とルカ一四・一〇比較参照)。イエスの言葉の多くは智慧文學、特に箴言の様式である。彼は自然や人間生活を觀察せられ、聖書を學ばれ、上よりの啓示を通して、そこから箴言的に教えられた。自然からは、一粒の麥(ヨハネ一二・二四)野の百合(マタイ六・二八)からしだね(ルカ一三・一九)の如き、また人間の生活からは放蕩息子の例話(ルカ一五・一一)の如き、聖書からは「人の生くるはパンのみに由るに非ず」(マタイ四・四、申命記八・三)の如きはその例である。イエスは當時の民間の箴言をも引用せられたが(ヨハネ四・三七)そればかりでなく、彼自身父よりの啓示による深い洞察をもつて箴言を創作せられ、それを街頭に、山上に、湖畔に、群集の前に於て宣教せられて、當時の民の心に深い印象を與えられ、それが決して消えないように刻印せられた。イエスは「地にも書かれ」(ヨハネ八・八)た以外に一冊の書物も書かれなかつたけれども、人々の心に書かれた彼の言葉は、

福音書を通して、人類の至寶として傳えられている。恐らくイエスほど多くの宗教的箴言を、その「定義」の眞の意味に於て創作せられた方はないであろう。

J・A・ケルソーは云う「宗教の圈内に於てイエスの箴言的發言は、他の如何なる箴言の輯集よりも廣く行われ、遠く行き渡れる感化を與えている」と。<sup>(26)</sup> イエスは律法と預言を成就せられたばかりでなく、また智慧の完成者でもあったのである。

註

- 1 James A. Kelso; on "Proverbs" in Ency. Rel. and Ethics.
- 2 箴言の「箴」は本來、鏡(はり)の意味をもつていた。鏡は古代中國の鏡術(はり醫者)と關係があつて人の心を醫す意味をもつてゐる。箴は鐵器時代以前の「はり」である。
- 3 James A. Kelso の論文より引用。
- 4 Oesterley; Proverbs, (West. Comm.) p. LXX.
- 5 Ibid., p. XI.
- 6 G. C. Martin; Proverbs (Cent. Bib.) p. 9.
- 7 この分類は Ed. König "Proverbs" in J. Hastings's Dictionary of the Bible の語彙を食つてゐる。
- 8 S. R. Driver; An Introduction to the Literature of the O. T. (1916) p. 393.
- 9 Oesterley; Proverbs, LXXII.
- 10 Harry Ranston; The Old Testament Wisdom Books and Their Teaching (1930) p. 40.
- 11 ホースターレイのみはマメン・ホル・オンが舊約の精神に感化せられ、その教訓は、イスラエルの預言運動にもとづくものであると主張する。cf. Ranston, The Old Testament Wisdom Books p. 43 foot-notes.
- 12 Oesterley; Proverbs, p. LI.
- 13 Thodor H. Robinson; The Poetry of the Old Testament, p. 187. 註11參照。
- 14 Ranston; Ibid., p. 46.
- 15 Ranston; Ibid., p. 46.
- 16 Ranston; Ibid., p. 41.
- 17 Oesterley; Ibid., p. LXXI.
- 18 エドワード・ランスタンの聖書の三つの區分(律法預言聖文集)は、最初に「マメン・シラの序文に明かに述べられている。それは 132

B.C. 以前に三種類の存在していたことを暗示する。

61 cf. Delitzsch; *Commentary on the Proverbs* (Eng. trans.) p. 157. ナイリツチは申命記と箴言との言葉の類似を指摘してゐる「これを汝の指をむすび、これを汝の心の碑と銘せ」(箴言七・三)と申命記六・六、八參照。その他箴言三・一二、申八・五。箴三・九—申四・五一、八、箴一・八、四・一〇、一〇、三、三、六、二〇、申六・四—九參照。

20 W. R. Harper; *Amos and Hosea* (I. C. C.) p. CIX.

21 *Ibid.*, p. CXXX.

22 Oesterley; *Hebrew Religion*, p. 370.

23 Wilhelm Schencke; *Wisdom-Chokma in the Jewish Hypostasis-Speculation* (1913) cited in O. S. Pankin's *Israel's Wisdom Literature* (1936) p. 237.

24 Toy; *Proverbs* (I.C.C.) p. 172.

25 Rankin; *Ibid.*, p. 243.

26 James A. Kelso; "Proverbs" in *Ency. Rel. and Ethics*.

T. K. Cheyne; *Job and Solomon*. (1887)

G. C. Martin; *Proverbs Etc.* (Cent. B.) (1908)

T. T. Perowne; *Proverbs* (Cam. B.) (1916)

J. F. Genung; *The Hebrew Literature of Wisdom in the Light of To-Day* (1906)

R. F. Horton; *Proverbs* (Expos. B.) (1891)

D. G. Wildeboer; *Die Sprüche* (K.H.A.T.) (1897)

B. Genser; *Sprüche Solomos*. (H.A.T.) (1937)

O. S. Rankin; *Israel's Wisdom Literature* (1936)

Harry Ranston; *The Old Testament Wisdom Books and Their Teaching* (1930)

W.O.E. Oesterley; *The Book of Proverbs* (W.C.) (1924)

*Ibid.*, *The Wisdom of Egypt and the Old Testament* (1927)

H. H. Rowley (Editor); *The Old Testament and Modern Study*, (1951). "Wisdom Literature" by W. Baumgartner.

James A. Kelso, "Proverb" in *Ency. Rel. and Ethics*.

Ed. König; "Proverb" in the *Dictionary of the Bible*, by James Hastings.

櫻井斗風「箴言」(聖書十一卷)

参考文献

C. H. Toy; *Proverbs* (I.C.C.) (1904)

F. Delitzsch; *Das Spruchbuch* (1873)

Engl. Translation. (1875)

箴言の研究